

エピソードを通じてみた大平像

今野 耿介

私が秘書官として官房長官の大平さんにお仕えしたのは、安保騒動の後をうけて池田内閣が発足して約半年を経過した昭和三十六年二月から、翌三十七年夏の池田内閣の改造で大平さんが外務大臣に就任されるまでの約一年半である。

官房長官の仕事は、大平さん御自身も「官房長官は、多忙な職務である。内政、外交全般にわたり絶えず目を光らせ、神経を働かせていなければならない。国の内外を問わず、また昼夜を分かたず、何か重要なことがおこると、政府を代表して直ちに対応しなければならない。また、政府各部と与党には、全幅の協力をとりつけねばならず、野党、報道界、労働界はもとより、学界、教育界、芸能界、スポーツ界とも折り合いをよくして行かねばならない。あらゆる変化に応じられる柔軟な姿勢が必要で、硬直してはやっていけない。」(『私の履歴書』)と書いておられるように、確かに多忙である。多忙過ぎるといっへきかも知れない。

さらに、政府のスポークスマンとして一日数回の定例記者会見、突発事件でもあれば臨時の記者会見が加わる。また日本独得の「夜討ち」、「朝駆け」の陋習(?)にも付き合わざるを得ないのが実情である。

日本で一番忙しく、一番心労の多い役人とも言うべき官房長官の秘書官に任命された私が、側近で過した一年半の間およびその後の大平さんとの限られた接触を通じて体験した数々のエピソードのうち、特に印象が深かったもの二、三を通じて私の大平像を描いてみたいと思う。

「ワン・オブ・ゼム」とは？

秘書官になって間もなかったある日の記者会見で、記者の一人が、「内閣調査室（現在の内閣情報調査室、以下「内調」という）は、かなりの予算をつかって情報を収集しているが、長官はこの内調情報をどのように評価しているのか」と質問した。

当時、内調に席を置いたまま秘書官をしていた私は、長官の口からどのような答が出るか固唾をのんで耳をそばだてていた。しばらく間を置いて、大平さんはお得意の英語で「ワン・オブ・ゼムだな」と答えられた。この答は、あるいは文字通りそれだけの意味で言われたのか、あるいはアレコレ勘案されたうえでの大平さん一流の慎重な表現であったのか明らかではない。しかし、内調に席のあった当時の私としては、身びいきのせいもあってこの答にはいささが失望した。

何はともあれ、内調は官房長官直属の情報収集機関である。殊に一部の内調情報は、長官自身もまた外務省筋なども評価していたことを私も知っていた。それにも拘らず、長官の評価が「ワン・オブ・ゼム」というのでは、内調に席を置いている者としては情けなくもあり不満でもあった。

内調は国内、国際情報の収集をはじめ、学識経験者に委託して国政に係わる重要事項の調査、研究を行い、また民間調査機関を通じて国民の「意識調査」等を行っていたが、これらの成果を定例的、制度的に官房長官に報告する体制が当時とられていなかった。もちろん重要事項については調査室長などからその都度報告が行われてはいたが、長官が多忙なため、その機会をとらえるのは必ずしも容易ではなかった。

国の内外を問わず、いつ何が突発しても政府としてのコメントを求められる立場にある官房長官としては、予想される事態の背景を予め把握しておく必要があることは言うまでもないが、外務省の場合は、以前から週に一度、長官に定例報告をする機会が設けられていて、毎回、次官が一時間程度のレクチャーをしていたのである。

「ワン・オブ・ゼム」発言に触発されたこともあって、私は、内調についても「定例報告」の機会を設けて戴くよう進言し、ほどなく実現した。官房長官のように多忙な立場にある人にレクチャーをする時間を確保するためには、この「定例報告」という制度は、私の期待どおり極めて効果的であった。

後で聞いたところによれば、この制度の採用は長官への報告の風通しをよくしたばかりでなく、内調職員の高揚にも大いに貢献したという。なお内調情報の比重が増すにつれて、その後この定例報告は総理に対しても行われるようになった。私は大平さんから「ワン・オブ・ゼム」の真意をうかがう機会をついに失ったが、この発言に私なりに反応して、内調の定例報告会を実現したことは、私の「善政」(?)であったと思っている。

「風流夢譚」事件の処理

私が秘書官に発令された日(昭和三六年二月一日)、「中央公論」社長宅殺人事件が発生した。同誌に掲載された「風流夢譚」が皇室を侮辱するものであるとして、右翼の少年が同社長宅を襲い家人二人を殺傷した事件である。

事件の処置が刑事事件として司法当局に委ねられることは当然として、それとは別に、筆者と中央公論社を名譽毀損で告訴すべきであるという世論が強まった。

大平さんは、告訴することは、皇室と国民の間を冷たい法律とその論理によって律することになると同時に、このような問題が法廷の乾いた論争の対象にされることは望ましくないと考え、同じ意見であった池田首相とともに、その政治的収拾を図ることとし、ひそかに各方面の有識者の意見なども聴取し、慎重に検討した結果、告訴を見送ることとした。

秘書官就任早々に大平さんの識見、人柄などに殆ど予備知識のなかった私ではあったが、この事件の処

理を通じて大平さんの緻密、周到な政治的配慮および事をすすめるに当たったの慎重な気配りに感心した次第であった。

日韓交渉

昭和三十六年五月一六日、韓国で軍事クーデターの結果、朴正熙政権が誕生したが、この年の夏頃から国交正常化にむけての韓国側からのアプローチが見られた。もともと、当時は両国間には公の接触ルートがなかったこともあって、韓国側は外務部ではなく中央情報部がこれに当たっており、日本側についても対応上、外務省ではなく内調に非公式なコンタクトがあった。

その後、数次にわたる両者の接触の後、翌年春早々、先方の招待を受けて内調の幹部が渡韓し、当時、中央情報部長であった実質韓国No.2の金鐘泌氏と面談した。この時、金氏は率直に韓国の経済非常事態について説明し、日本の援助に対する強い期待を表明するとともに、韓国の実情を知るための農村部の視察とあわせて、三八度線の視察を奨めたという。視察を終えて帰国の挨拶に金氏を再度訪れた彼等に、日本に帰国の上は官房長官をはじめ閣僚者に率直な視察報告をするよう金氏は特に要請したという。なお、余談であるが、この時、金氏に面談した彼等は、日本語を巧みに操る金氏の誠意あふれる真摯な態度に深く感銘したという。

大平さんは帰国した内調幹部の報告をよく聞かれたというが、この報告を通じて大平さんは金鐘泌という人物について、かなりの理解と認識をもたれたのではないかと思う。そしてこの年の夏、大平さんは内閣改造で外務大臣に就任された。

韓国との国交正常化の機運が盛り上がりつつあると判断した池田首相は、この年の六月、参院選遊説中、「日韓国交正常化は選挙後ぜひ実現したい」と発言、朴韓国最高会議議長もこれに応えるかのように九月、

「たとえ国民の一部から非難されても日韓正常化をはかる」と声明を発表する等、双方に国交正常化へのムードが盛り上りつつあった。

そしてこの年一二月、たまたま池田首相が欧州各国歴訪の留守中、金中央情報部長が国交正常化の前提としての対日請求権問題を交渉するため来日し、大平外相との間で丁丁発止の劇的な交渉が行われた。この交渉は、金、大平ともに祖国を思いかつ両国の恒久平和を念頭において、政治家として互いに腹を割ったの凄絶なものであった。無償三億ドル、有償二億ドル、ほかに経済協力で一億ドルを供与するという、いわゆる「金・大平メモ」に盛り込まれた内容は、この両者の真剣な交渉の結果生まれたものである。

この対日請求権交渉は、大平さんが外務大臣にならなれたことから、私の秘書官時代のことではないが、その後、大平さんとの間でたまたまこのことが話題になったとき、大平さんが口を極めて金氏の人物およびその政治家としての決断を激賞しておられたことが、いまなお私の記憶に残っている。

盟友田中氏

昭和四四、五年頃、私が新潟県警に勤務中、大平さんが新潟市の市長選の選挙応援に来られたことがあった。お蔭で私は久しぶりに大平さんと夕食をともしながらお話をする機会に恵まれた。

また昭和四五、六年頃、私が高松の四国管区警察局に勤務していたとき、今度は田中角栄さんが高松市長選の選挙応援にみえた。

新潟といひ高松といひ、いずれも県庁所在地には違いないが、政令指定都市でもない都市の市長選に与るの大物政治家が万障繰りあわせて応援演説に行くことは、特別の場合は別として、当時、珍しかったのではないかと思う。それにも拘らずお二人が、相手の地元なるが故に、その市長選の応援に駆けつけられたのは、互いに相手に対する並々ならぬ友情によるものであったと思う。

また、田中さんは昭和四七年、組閣に当たって盟友大平さんを外務大臣に据え、外交関係は大平さんにまかせるという姿勢の下に、協力して懸案の日中国交正常化に取り組んだ。そして組閣の僅か二カ月半後に大平さんを帯同して中国に赴き、同年九月二十九日、国交樹立の共同声明に調印、積年の重要案件を電光石火、解決した。

田中内閣が組閣後僅か二カ月半でこのような大きな成果を挙げたのも、田中、大平両氏の信頼関係、温い友情の基盤があつたからこそできた仕事であると思う。

それはそれとして、田中さんと大平さんには、一見、性格の点でも経歴の点でも、殆ど共通項がないように見える。しかし、私が見る限り、二人は何となくウマが合うとでもいうのが、互いに心に通じ合うものをもっておられたように思う。ただ、それは互いに相手を利用するというような次元のものではなく、あえて言えば、より高い次元の結び付きとでも言うべきものであつた。

昭和五一年七月、田中さんが逮捕された。「『盟友』田中の逮捕は、大平にとつては限りない苦しみであつた。翌朝、彼は親しい友人、政治家らに電話をかけ、『昨夜はよく眠れなかつた。悲しいことだと思ふよ』と言ひ、『空しい』という言葉を連発した。大平の顔には憔悴の色がかくせなかつた。」（『大平正芳人と思想』三七〇頁）とされているが、それは心の友の悲運を悲しむ大平さんの真情を吐露したものであろう。

二人は互いに心を許した盟友であつたと、今でも私は考えている。

（元内閣官房長官秘書官）